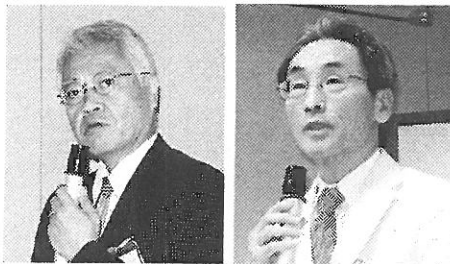


太陽エネデザイン研設立シンポ 技術革新で建築に融合

機能とデザインの融合を
一。太陽電池と建築外装の技
術連携を目的に設立された太
陽エネルギーデザイン研究会
が23日、東京都港区の松田平
田設計本社で設立記念シンポ
ジウムを開いた。国内外の環
境建築の事例を紹介しながら、
建築デザインを損なわな
い自然エネルギー利用設備の
あり方を模索した。今後、業
界、業種を問わず参加者を募
り、海外も含めて研究結果を
発表する。

急速に普及している太陽光
発電システムは、発電効率な
ど商品機能がクローズアップ
され、建築デザインとの融合
や景観との調和についてはあ
まり議論されていない。
同研究会は、建築デザイン
を損なわない太陽電池の開発



大野氏

伊澤氏

をマネジメントすることを目
的に、大学、設計事務所、ゼ
ネコン、電力会社など異分野
が集まって設立した。
会長を務める伊澤岬日大理
工学部教授は「建築も都市イ
ンフラも、太陽エネルギーに
依存する方向に向かうと思
う」とした上で、「(太陽電池
が)普及することは喜ばしい
が、とってつけたような印象
はぬぐえない。技術的な効果
だけでなく風土にあったスタ
ンダードが必要となってい
る」と、建築、景観に調和す
る機器の必要性を強調する。
また、結晶型に比べて軽く、
曲面に対応できるデザイン性
の高いアモルファス型太陽電
池など、技術開発が進んでい
ることに触れ「日本国内だけ
の戦いになるのではなく、日

本のスタンダードとして、世
界に売り込めるようにすべき
だ。いま、研究を始める重要
な時期にきている」と、国際
標準化に向けた取り組みも視
野に入れている。

シンポジウムで講演した大
野二郎日本設計環境創造マネ
ジメントセンター長は、現在
の多くの建築について「機械
室は地下にあって、室内には
風だけが出てくるように、エ
ネルギーを表現していない。
いわば大量のエネルギーを消
費する隠蔽偽装建築だ」と批
判し、エネルギーとの関係性
を意識、表現する、様相建築
が求められると述べた。

国内外の建築に取り入れら
れた環境技術を紹介し、「美
しくなければ環境建築ではな
い。地球を冷やすには、われ
われが熱くならないといけな
い」と締めくくった。

次回の研究会は9月1日に
開く。斎藤公男日大名誉教授
が特別講演する。